

キリスト教は邪教ではありません

村上 喜良

わたしがあなたがたを愛したように、
互いに愛し合いなさい。
これがわたしの掟である。
(ヨハネ 15：12)¹⁾

はじめに

筆者は長年、本学で「キリスト教思想」を講義してきました。その経験から、特に近年のレポートの内容から、次のことを痛感しています。それは、キリスト教、そればかりでなく、そもそも宗教というものに対する学生さんたちの関心がとても薄れていっていることです。これは若者だけでなく、多くの日本人に言えることです。これはとても残念なことであり、大変ゆゆしき問題だと、筆者は考えています。そこで次のことを考察してみたいと思います。何故キリスト教を学ばなければならないのか、何故若者は、日本人はキリスト教や宗教に関心を持たないのか。この考察によって、学生さんたちがすこしでもキリスト教に関心を持ってくれればと願います。

とはいっても、筆者は、何も学生さんたちをキリスト教に改宗させることを目的として講義しているのでは、決してありません。確かに、筆者はキリスト教を信じています。しかし、キリスト教が絶対に正しいと盲信などしていません。だから、筆者の考察は、いや信仰さえもが、つねに批判や反論に開かれています。

そのことは覚えておいてください。

もう一つ、断っておきます。この考察は決して厳密な論文などと呼べるものではなく、『文学部論叢』の主な読者である学生さんたちに向かって書かれた、いわば啓蒙のためのものです。キリスト教への偏見をなくし、学ぶ意義を見出し、関心をもって、正しくキリスト教や宗教に関して考察できるようになるための基礎を提示するものです。それ故、学生さんにとって入手困難な文献や、翻訳のない不慣れな外国語の文献を極力もちいずに、入手しやすく読みやすい文献を指示しつつ、述べていきたいと思います。そうすることで、学生さん自身による更なる勉学の便になれば良いと思います。

しかし、それを通して、やはり筆者のキリスト教や宗教に関する思いは、哲学的吟味を受け、それが基底となって表現されることになる訳です。それ故、単なる啓蒙にとどまるものではありません。だからといって、その哲学的吟味をことさらに研ぎ澄ませて、スコラ哲学²⁾のような微に入り細を穿つような論考はしません。それは学生さんを混乱させるだけで、関心を持ってもらうという目的を逸脱してしまいます。したがって、哲学的吟味は疑問として投げ掛けるに留めます。なので、これは厳密な学術論文でもありません。つまり、これは単なる啓蒙でも厳密な論考でもない、そのあいだにある論説です。

1. キリスト教や宗教に関する知識不足

講義の最初では、キリスト教に関してどのようなイメージを抱いているか、学生さんたちにレポートしてもらっています。そのなかで、残念ながら良いイメージを抱いている学生さんは、ほとんどいません。むしろ、キリスト教だけでなく、そもそも宗教に対してあまり良いイメージを抱いてはいません。それどころか、かなり否定的に感じています。それをまとめてみると、宗教は怪しげなもの、危ないものとなります。その理由は二つ考えられます。ひとつは、宗教団体

が引き起こす不可解な、そして残虐な事件が後を絶たないからです。日本でいえば、すぐに思い出すのが、オウム真理教によるサリン事件です。他方、グローバルにみれば、また歴史的にみても、キリスト教とイスラム教とユダヤ教の間で繰り返えられる相互憎悪の宗教テロが、思い浮かびます。日本の報道を見てみると、イスラム過激派のことばかりが目につきますが、そのような過激な行動はそれぞれの宗教にも、実際に見られることです。これらの宗教的事件は、確かに、宗教を危険なものと人々に思わせるに十分です。

もう一つの理由は、キリスト教や宗教に関する知識の圧倒的な不足です。キリスト教に限って言えば、神の教えである隣人愛を純粋に実践し、この世に平和をもたらした信徒や修道士・修道女たち、聖職者は世界中のどこにでもいました。いまでもそのような人々が平和のために、愛のために活動しています。キリスト教、特にカトリックは、それらの聖なる人々の愛に支えられてきたのです。そこで思い出すのが、マザー・テレサです。彼女はインドの貧民街でひたすら貧しく置き去りにされた人々とともに生き、彼らの絶望的な孤独の寂しさ、暗黒に包まれて消えゆかんとする魂に、愛という最高の温もりを生涯にわたって捧げました。カトリックでなくとも、プロテスタントなら、アーサー・キング牧師がいます。彼は非暴力によって黒人差別と闘い、黒人を差別的奴隷状態から解放しました。さらには、ヒンドゥー教にはマハトマ・ガンジーがいます。彼も非暴力主義を貫き、イギリスの植民地であったインドを独立させます。そのような聖なる人々は、イスラム教にもユダヤ教にも数多くいるのです。

このように宗教には良い面も多いのです。しかし、それらは、先に述べられた宗教の悪い面に隠れてしまい、忘れ去られています。それどころか、宗教の良いところに関して、そもそも全く知識がないことのほうが、多いように思えます。これでは、宗教は怪しげで、危険なものであると烙印が押されるのも、致し方ありません。まさに無知は誤解と偏見を生むのです。

さて、上では宗教に関する無知を、二つに大別しました。ひとつは、宗教の良

い面も知らない訳ではないが、悪い面のみが宗教の本当の姿だとしてしまう無知です。もうひとつは、宗教の悪い面のみに関する知識があり、良い面に関する知識は実際に全くない場合の無知です。前者の無知は誤解であり、後者の無知は偏見です。では、無知による誤解と偏見はどのように生じるのか、考えてみます。

偏見の無知

順序を逆にして、誤解からではなく、偏見から考察をはじめます。不可解で悲惨な宗教的事件に関する情報だけで、宗教そのものを悪いものであると判断するのは、まさに偏見です。偏見の根底にあり、それを支えている理路は、ある事柄の一つの部分から、その事柄の全体を断定するという推論です。たとえば、こういうことです。ある人があるとき嘘をついた。だから、この人はいつも嘘をつく人だ、あるいは、嘘つきだ、と決めつける。これは、簡単にいえば、ひとつのことからすべてを断じる、ということであり、論理学的な言葉を用いれば、単称判断を全称判断に拡張するということです。あきらかに、この推論は不当な拡張です。

それにもかかわらず、この不当な推論は、日常的によく用いられるものです。その理由は、私たちの心理的な側面にあると思われます。悪いこと、あるいは、否定的なことの印象は強く、良いこと、あるいは、肯定的なことの印象は弱いからです。すなわち、反対する人の声は大きく騒がしく、賛成する人の声は小さく静かなものです。悪の声は善の声をかき消します。さらに、良い面がかき消される心理的な理由があります。それは、物事には良い面と悪い面のどちらか一方しかないという思い込みです。つまり、物事には白と黒しかないというパンダ的思い込みです。この心理的な思い込みと悪の声の騒がしさと不当な拡張推論とが重なって、宗教は悪である、宗教はアヘンである³⁾、という偏見の無知が生じるのです。つまり、偏見の無知の全体は、パンダ的思い込みと悪の印象の強さ——この二つを合わせてパンダ的発想と以下では呼ぶことにします——、さらに不当な

拡張推論にあるのです。確かに、パンダ的発想と推論は何も宗教だけでなく、多くの事柄に関してもよく見られます。しかし宗教批判の場合、それが特に強烈で、正すにはあまりにも頑強です。何故なら、宗教的事件は心が張り裂けてしまうほどに悲惨であり、そこから憎悪が燃え立ち、滾るからです。つまり、悪の印象は強烈なのです。しかし、それでもパンダ的発想と推論は誤りであり、したがって、避けるべきです。

誤解の無知

次に、誤解の無知に関して考えてみます。宗教の悪い面だけでなく、宗教の良い面も知っているにもかかわらず、宗教そのものは悪いものであると断じることが、まさに誤解です。この誤解が生じるのは、先の偏見の無知で述べたのと同じ心理的要因があります。それは、悪の印象は強く、善の印象は弱いということです。しかし、ここではパンダ的思い込みはありません。何故なら、宗教において悪い面も良い面も共にあることを認識しているのですから。ところで、物事を正しく考察するには、その対象に関する心理的印象は一旦わきに置き、思考が心理的影響を被らないように、それを括弧に入れて置く必要があります。そうすると、問題は次のようになります。宗教の良い面と悪い面の関係を如何に捉えるか、ということです。これに対する解答は、大別して二つあります。一つは、相対主義的關係、もう一つは、本質と現象の存在的な差異関係です。

相対主義的關係とは、良いか悪いかは、個人それぞれの見方による相対的な相違関係に過ぎないというものです。しかもそこには、そのどちらが正しいかは決められない、どちらも正しいのである、という主張が含意されています。これは、まさに相対主義的発想です。パンダ的思い込みや、心理的印象から解放されている学生さんの多くが、このような主張をします。

筆者は相対主義を全面否定するものではありませんが、そこには考えてみるべきことがあります。それは、相対主義は、いつも、すべてにおいて正しい訳で

はないということです。次の例を考えてみます。40度のお湯につかるとき、ある人はそれを熱いと感じ、ある人はちょうど良いと感じ、ある人は温いと感じる。なかには、冷たいと感じる人もいます。確かに、この場合、お湯の熱さは人によって相対的であり、誰が正しいと論じるべき事柄ではありません。しかし、100度のお湯の場合ならどうでしょうか。誰もが熱いと感じます。それどころか、誰もが火傷をしてしまいます。心頭滅却すれば火もまた涼し、という格言もありますが、それは特殊な例であり、極論です。なので、100度では相対性は正当な主張ではなく、普遍的な主張です。つまり、ここで押さえておくべきことは、相対的主張は適応される範囲は限られていて、ある範囲では普遍的な主張が適切となるということです。しかも、その相対性は普遍性を破棄することはありません。相対主義とは、この普遍性さえをも排除するのであり、筆者はそれには賛同しません。

しかし、と食い下がってくる学生さんがいます。批判的精神それ自体は大変良いことです。批判はこうです。お湯の熱さは感覚的な事柄であり、良いとか悪いとかは、感覚的なこととは別のことである。したがって、感覚的なことに関して主張しえることが、そのまま道徳的な事柄にも妥当すると類推することは誤りである。その通りです。感覚的な事柄と道徳的な事柄の間に類比は成り立ちません。鋭い反論だと思います。分かり易い例示で、逃れようとした筆者が不誠実でした。あやまります。

では、良い悪い、すなわち善悪の道徳的な事柄について考えてみます。人殺しは善でしょうか、悪でしょうか。多くの学生さんたちが、若者らしい批判精神に引きずられ、これもまた相対的だと主張します。理由はこうです。平和の世であれば、人殺しは悪であるが、戦時下であれば、敵を多く殺すことは善であり、それをなし得た者は悪人どころか英雄として讃えられる、というものです⁴⁾。戦時下という特殊な例を持ち出さずとも、平和の世であっても、強盗に襲われ自らの命を守るために、相手を殺害することは許される、という主張もなされます。覆

すには、なかなか手ごわい例証だと思います。

しかし、筆者は、これらの例証を以て、人殺しの善悪に関して、その相対性を主張し、かつ、人殺しが悪であるという普遍的な主張を排除することはできない、と考えています。反論に用いられた例を詳細に見てみると、そこには制限が掛けられています。戦時下であるとか、強盗に襲われて命が危険にさらされたとか、です。これらの条件のもとでは、人殺しは善ですか、悪ですか、と問われれば、当然圧倒的多数の人たちが善である、と答えると思います。筆者も、かなりのわだかまりはあるのですが、そう答えてしまうと思います。しかし、もともと質問はこうです。人殺しは善ですか、悪ですか。制限を掛けずに、このように端的に質問されたら、どうでしょうか。多くの人が、人殺しは悪いことである、と答えるのではないのでしょうか。それは、こういうことです。人殺しは悪であるとの主張は普遍的であり、それが善とみなされるのは、特殊な状況下に限られる、ということです。

否、特殊な状況下で人殺しが善とみなされるというのは、不正確な表現です。厳密には、特殊状況では人殺しが許容されるだけである、というべきです。つまり、特殊状況においても人殺しは悪であることは変わらないのです。ただ、仕方のないことだと許容されるだけです。あえて善というのであれば、それで当人が殺されずに済むという善の視点からのみなのです。以上が、正当防衛的殺人の理路です。そうすると、戦争が国家レベルでの正当防衛であるなら、それは許容されるものとなるでしょう。

しかし、筆者は個人レベルでの正当防衛的殺人は許容できても、国家レベルでの戦争という正当防衛的殺人は許容しがたい、との思いが強いです。なぜなら、個人的レベルでの正当防衛的殺人では、加害者と被害者とがほぼ一対一の関係であり、その状況は突発的なものです。一方、国家レベルでの正当防衛的戦争は、多対多の不特定多数の、殺されるか殺すかの関係です。そこでは、両国のどちらにおいても、その戦争の原因とは無関係な普通の善良な市民が多くいて、当然そ

の中には無垢なる赤ん坊も子供もいます。そのような人々も戦死することになります。さらに、戦争は突発的ではありません。戦争にはそれにいたるまでの経緯があります。ならば、戦争以外の解決策をひねり出す時間的猶予はある訳です。そのほか多くの相違点が考えられます。そもそも個人レベルでの正当防衛と国家レベルでの正当防衛とを類比するには、両者には距離がありすぎると思います。なので、筆者は国家レベルの正当防衛的戦闘を許容することに、かなりの疑念があります。この問題は、もっと精査すべき筆者の課題の一つです。

さて、以上のように考察してみると、次の二つのことがいえます。ひとつには、こうです。人殺しは悪であるというのは普遍的な主張であり、状況によっては人殺しは許容されるというのは相対的な主張です。前者の普遍性は、後者の相対性を破棄するものではありません。両者の関係は、いわば原則と例外の関係にある訳です。ならば、考察すべきことはこうなります。何故、人殺しは悪なのか、という問いではなく、いかなる状況において人殺しは許容されるのか、という問い掛けです。これに対して、人殺しは悪である、その普遍性の根拠こそが問われるべきであるとの反論が推測されます。しかし、筆者は、普遍性の根拠への問いを問うことはしません。その理由は後述します。

もうひとつは、感覚的な事柄と同様に、道徳的な事柄にも、普遍性が妥当する領域と相対性が妥当する領域がある、ということです。そして、前者の普遍性は後者の相対性を、後者の相対性は前者の普遍性を排除することはありません。だからこそ、この世の中は、白と黒だけのパンダの世界では、決してないのです。

2. 本質と現象、普遍と相対の関係／善と悪の関係

ここで、新たな問いが生じます。普遍的領域と相対的領域は如何に関わるのか。筆者はこれを次のように考えています。普遍的領域とは、物事をまさにそれであるところのものとする本質の領域です。他方、相対的領域とは、その本質が

出来している現象の領域です。現象の領域はさらに二分されます。ひとつは、本質がまさにそのものとして出来している現象領域、ふたつには、本質が異化して出来した領域です。それに応じて現象も本質的現象と異化的現象に区分されます。本質が異化するのとは、本質それ自体を理由とはしません。なぜなら、そうであるなら本質自身が自らの内に異質なものを含むことになるからです。したがって、現象は現象相互の制約や、現象を媒介するものによって異化されるのです。一方、現象が本質的でありえるのは、二つの要素が必須です。ひとつは、現象相互の制約や現象を媒介するものの異化に、媒介するもの自身が抗することです。もうひとつは、現象を本質的現象に導く本質からの支えが必要です。なぜなら、媒介者は本質からの現象であるのですから、媒介者それ自体が本質を現象させることはできないからです。

説明がかなり抽象的になってしまって分かり辛いと思います。そこで、例を挙げてみます。ここにお爺さんがいます。正直者で、根がとっても優しいお爺さんです。お爺さんは嘘をつくことはなく、困っている人を見ると必ず助けます。しかし、あるとき彼は嘘をついてしまい、そのせいで相手を困らせ、悲しませてしまいました。お爺さんの根っこ、すなわち本質は誠実さと優しさです。そして、その本質がそのまま素直に現象しているのが、お爺さんの日頃の一つ一つの誠実で親切な行い、すなわち本質的現象です。しかし、それも周りの助けがなければ不可能なことであり、本質的な優しさの溢れる支えがなければ、不可能なことです。他方、お爺さんが嘘をつき、人を悲しませたということは、お爺さんもまた完全な人間ではない、ということです。さらには、周りの状況の制約もあったはずですが、しかし、このことが翻って、お爺さんの根っこである本質的な誠実さと優しさが、破棄される訳ではありません。

このように普遍的な本質領域と相対的な現象領域を前提とすると、宗教の悪い面と良い面とは、どのように理解されるのでしょうか。以下では、本論の考察対象の中心であるキリスト教にもどって考察します。

キリスト教はそもそも善か悪か？

キリスト教の善い面と悪い面のどちらが、キリスト教の本質領域なのでしょう。悪い面が本質であるなら、キリスト教はそもそも悪であり、善なる現象は本質的悪の異化現象となります。他方、本質が善であるなら、キリスト教そのものは善であり、悪なる現象は本質的善の異化的現象となります。理解を助けるために平易な表現をとれば、前者の主張はこうです。キリスト教は根っから悪いものであり、慈善的行為は偽善に過ぎない。後者の主張はこうです。キリスト教はそもそも善いものであり、悪く思える事件は様々な特殊の状況に制約された、例外的なものに過ぎない。さて、どちらが正しいのでしょうか。

結論を先に述べれば、後者が正しいです。つまり、キリスト教の本質は善なのです。その理由を以下述べていきます。

旧約聖書の創世記第1章では、神による天地創造が物語られています。神は六日間でこの世界を創造し、最後にこういわれます。「見よ、それらは極めて良かった。」(創世記1:31) この聖句を、偉大な西欧の教師である聖アウグスティヌスは、こう定式化しています。存在するものはすべて善であり、そうであるならば、悪は善の欠如にすぎない、と⁵⁾。同じことを偉大なる教会博士である聖トマス・アキナスは、こう述べています。有と善とは交換可能な超越概念であり、悪は善の欠如である、と⁶⁾。

両者の表現は、スコラ学的で分かり辛いと思いますので、平易な言葉で日常的な表現をして、説明し直してみます。雨が降ってきた。ここに傘があるよ。それは良かった。あれ、でも、穴が。この傘じゃ、善くないね。いつ雨が降るか分からないのですから、たとえ傘が破れていても、傘があること自体は善いことです。しかし、穴があると、その傘の善さは欠けてしまいます。さらに、こうもいえるでしょう。この世界は善きものであり、世界が悪いのは、その善さがたまたま欠けているだけに過ぎない、と。

キリスト教は、以上のことを教義として、信じています。ならば、キリスト教

そのものは善であり、悪なる現象は本質的善の異化現象、すなわち欠如化現象なのです。

それだけではありません。イエスは、何が最も重要な掟であるか、と問われて、次のように答えています。第一の掟は、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、これと同じように重要な第二の掟は、隣人を自分のように愛しなさいである（マタイ 22：34-40）、と。ここで注意しておきます。神への愛という掟と、隣人への愛という掟が、第一の掟と第二の掟といわれていることから、神への愛が隣人への愛よりも上にある、と理解するのは間違いです。これは優劣や重要度の順でなく、単なる説明の順に過ぎません。神愛なくして隣人愛はなく、隣人愛なくして神愛はありえないと、筆者は思っています。

さて、イエスは、次のようにも語ります。敵を憎まず、敵をも愛しなさい、（マタイ 5：43-48）。つまり隣人愛は、同朋だけでなく敵にさえも及びます。しかも、イエスの命令は、自分を愛してくれる人を愛したからといって、何が立派なことだろうか、と大変厳しいものです。隣人愛は誰にでも向けられる普遍的で無条件なものです。それはイエスの絶対的な教えです。ならば、次のことは明らかです。キリスト教そのものは善であるばかりでなく、愛でもあります。キリスト教に見られる憎悪は、本質的愛の欠如化現象に過ぎないのです。

「悪は善の欠如」に対する批判

しかし、と学生さんたちは批判してきます。それは、とても立派なことです。悪は善の欠如だとか、本質的善の異化現象だとか、って、結局、それは自らの行った悪事を正当化するようなもので、罪や罰、そして責任から逃れようとしている詭弁にしか思えない。ましてや、十字軍などは正しい戦争と主張されるが、実に残虐な行為だったし、欠如化論で正当化しえるような代物じゃない、と。とても厳しい批判です。この批判を検討するために、問題点を整理します。まず、

欠如化論、あるいは異化論は単なる自己正当化の理論に過ぎないのか、という問題です。もうひとつは、十字軍、すなわち戦争をどう評価するか、という問題です。順次、考えてみます。

まずは、欠如化論への批判を考えてみます。結論からいえば、欠如化論は自己正当化のためのものではありません。そのように捉えられるのは、欠如化論を次のように捉えるからだと思います。欠如化論の定式を、まずは確認します。すべての存在するものは善であるのだから、悪は善がたまたま欠如しているに過ぎない。この定式の前半部分から、悪は実際に存在しないと解釈され、悪が実際に存在せず善しかないなら、悪に対する罪も罰も責任もない、という解釈だといいます。確かに、この解釈では欠如化論は自己弁解でしかありません。

しかし、それは誤った解釈です。悪は欠如という仕方で、実際に存在するのです。たとえば、今、500円の品物を買おうとしています。ところが、財布には480円しかありません。この場合、500円あることが善です。20円不足している480円は、その品物が買えないのですから悪いです。なので、480円という悪は実際に存在しています。さらに、480円という悪は、必要な500円という善との対比から見てのことです。一方、480円があること自体は、それで何か別のものを買えるのですから、善といえます。

さて、このお金の例えでは、罪や罰や責任という問題が見えてきません。そこで、先ほど扱ったお爺さんの例を、再び用います。それは、正直者で、根っから優しいお爺さんが、あるとき嘘をつき相手を悲しませたという例です。誠実なお爺さんは本質的に善です。他方、嘘をついたことは、本質的な誠実さを欠如した異化的現象であり、嘘をついたお爺さんは悪いです。この悪は欠如化した異化現象です。だからといって、欠如化的異化論では悪が存在しないという批判者の解釈は、やはり間違いです。なぜなら、嘘をついたこと、嘘をついたお爺さんの悪は、欠如的悪であっても、実際に存在したし、存在しています。また、欠如化した異化現象は本質的な善を破棄するものではありません。したがって、嘘をつい

たという悪、嘘をついたお爺さんは、本質的な善である誠実さと優しさを今も有しています。それ故、お爺さんは嘘をついたことを挽回しようとするのが可能です。この善への可能性が保有されるかぎり、嘘をついたお爺さんは善なる存在であり続けます。

すこし理路が込み入ってきたので、整理してみましょう。批判者の見解は、こうです。すべてが善であるなら、悪は実際に存在しない。悪が実際に存在しないのなら、罪とか罰とか責任とかもありえない。しかし、欠如化的異化論は、そう主張はしていません。すべては善であり、かつ悪もまた実際に存在するのです。ただ、善が実際にあるというのと、悪が実際にあるというのでは、同じ「ある」という言葉を用いますが、それは違っているということです。後者の「ある」は善が欠如して「ある」という意味です。批判者の見解は、この点を見逃しているのです。そして、欠如化的差異化において、悪が実際に存在するのですから、当然その悪に対する罪とか罰とか責任とかが主張できます。したがって、批判者がいうように、欠如化的差異化論は、自己正当化の詭弁では決してありません。欠如化した差異の悪を実行した人は、きっちりと悪の度合いに応じて裁かれなければなりません。それが正義です。

ここで、新たな問題が浮上してきます。悪の度合いとは、何によって決まるのでしょうか。悪は善の欠如や異化なのですから、悪の度合いは、善の欠如や異化の度合いに応じます。まずは、行為が善を志向していたかどうか。もし善の欠如化自体、すなわち悪自体を志向していたのであれば、それは許容されない悪であり、もっとも重い悪です。他方、行為が善を志向してのみ実施されたにもかかわらず、善が欠如し異化してしまった場合を考えてみます。志向された善からの欠如や異化が激しく、善から遠ければ遠いほど、その行為や実施者の罪や罰や責任は重くなります。逆に、欠如や差異が志向された善に近く、それで傷つく人が少なく、魂や心を含めてその傷が浅ければ浅いほど、その罪や罰や責任は軽くなります。あるいは、その罪は許容され、さらには赦されるかもしれません。それ

は、簡単にいえば、お爺さんは相手のことを想って嘘をついたのだから、その優しさに免じて赦しあげましょう、ということです。

「悪は善の欠如」は戦争を正当化するのか？

さて、もうひとつの批判を検討します。その批判はこうでした。欠如的異化論は十字軍を、いわんや戦争を正当化する自己弁解の論ではないか、というものです。その批判根拠は、上で見たように、批判者の欠如的異化論に対する理解の次の点にあります。欠如化的異化論にしたがえば、悪は実際に存在しない、だから罪とか罰とか責任は主張されない、と。さて、欠如論を正しく用いて、戦争について考えてみます。平和は本質的な善です。その欠如した異化現象が戦争です。なので、戦争は悪です。しかし、悪である戦争は紛れもなく実際に存在しています。したがって、戦争に対して罪や罰や責任を問うことは、当然可能ですし、そうしなければなりません。ところが、罪や罰や責任の度合いは、志向された善との欠如や差異の距離にあります。ならば、戦争が平和を志向したものであるなら、それは許容されてしまいます。これでは、確かに批判者がいうように、欠如論は戦争を正当化していると批判されても、いたしかたありません。実際、欠如論を唱えた聖アウグスティヌスも、それを継承した聖トマス・アクィナスも、そのような理路を展開しているように思えてしまいます⁷⁾。

しかし、これだけが、キリスト教の主張ではありません。神がシナイ山でモーセに授けた十戒は、汝殺すなかれ、と命じています。殺すなは神の掟です。したがって、その掟は絶対です。殺すなは裏返せば、命を育め、ということです。命を育めは、平和を育むことです。これこそが神の絶対的な掟です。人を殺す戦争は、平和が絶対的に欠如化した異化現象です。したがって、善の絶対的欠如は絶対的な悪であって、それを善と呼ばしめる如何なるものも存在しません。戦争は善の完全な欠如としての無を生じるだけなのです。ならば、戦争を正当化することは決してできません。これもまた、欠如的異化論から主張できることです。筆

者は後者の立場をとりたいと、いつも思いますが、後者の立場は抽象的な理想にすぎず、前者の立場こそ現実的であるというのも分からなくはありません。それでもなおかつ、筆者は後者の立場でありたいと願い、苦悶しています。

3. 欠如論が生み出す優しさ、寛容さ

善悪に関する欠如論を巡って考察を重ねてきました。ここで、一旦それをまとめ、まだ考察されていない点を浮き彫りにしてみます。

欠如論の定式：すべての存在するものは善であり、悪は善の欠如にすぎない。

批判者の理解①：悪は欠如にすぎない⇒悪は実際に存在しない⇒善のみが存在する。

②：悪は実際存在しない⇒罪や罰や責任は問われない。

③：悪は存在しないものとして正当化される。

正しい理解(1)：悪は欠如に過ぎない⇒悪は欠如として実際に存在している。

(2)：悪は実際存在している⇒罪や罰や責任を問える。

(3)：悪は実際に存在するものとして正当化されない。

(4)：悪は善の欠如⇒欠如の程度と悪や罪や罰、責任の程度の相等⇒正義。

(5)：欠如の程度によっては、悪や罪は許容される、あるいは、赦される。

新たな問題⑦：悪を裁き正義を実施する権限は誰にあるのか？

①：許容される、赦される、とは如何なることなのか？

姦淫の女

新たな問題を考察するために、福音書のなかの物語を取り上げます。それは、福音書のなかでもとりわけ有名で、キリスト教文化圏の多くの人々から好まれている物語です。筆者自身、福音書のなかで最も好きな物語です。ドラマティックな物語です。筆者の要約では、それを損なってしまうので、全文を引用することになります。

律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れてきて、真ん中にたたせ、イエスに言った。

「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところであなたはどうか考えになりますか。」

イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。イエスがかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イスは身を起こして言われた。

「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」

そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。イエスは、身を起こして言われた。

「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」

女が、「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。

「わたしもあなたを罪に定めない、行きなさい。これからはもう罪を犯してはならない。」

(ヨハネ8：1-11)

モーセの律法では姦淫は重罪、しかし、一体誰が石を打てるのか？

まずは、姦淫の罪に関して、欠如論を用いて考察します。姦淫は男女の正しい関係という善から欠如し異化しています。なので、姦淫は善の欠如として悪です。しかも、悪である姦淫は明らかに、この女において存在しています。姦淫の罪の重さは、善から欠如している距離に対応します。遠ければ遠いほど、罪は重いです。善から欠如している距離は、時代や地域や文化によって制約されるとはいえ、姦通は男女の正しい関係から、かなり遠く離れています。離れているというよりも、外れているというのが適切な表現です。したがって、モーセの律法でも、石打ちの刑が適応されるほどの重罪なのです。律法学者やファリサイ派、さらには、そこに居合わせた民衆も、当然そう思ったのです。

ところが、イエスは、この考えに一石を投じます。罪なき者が石を打て、と。この世の中で罪を犯したことの無い人などいません。なので、民衆はひとりひとり、その場を去っていったのです。しかも、年長者から、と聖書には書かれています。とても、興味深い記述です。やはり、人は長く生きていればいるほど、罪を犯すものなのです。

さて、イエスの主張について考えてみます。彼の主張の意味は、罪を裁き罰することのできるのは、罪なき者だけである、ということです。それは、誰もが認める正しいことです。小さな子供でさえ、それは分かっています。お母さんに、嘘をついちゃダメ、と叱られて、お母さんだって嘘つくじゃん、と口答えした覚えは、誰もあると思います。

ところで、この話をする、と批判精神の旺盛な学生さんは、こう切り返してきます。罪なき者だけが、罪を裁くことができるというなら、裁判は不可能になる、と。しかし、これは最初に述べたパンダ的な思考です。この世では、人はそもそも不完全な者ですから、その中からすぐれて正しい人、高潔な人が裁判官や弁護士や検事になる訳です。そして、自分たちは完全でないということを自覚していることが、とても大切です。その自覚は人を謙虚にし、人を裁く目を澄ませ

ます。さらには、自分も罪人と同様に、罪を犯しうる不完全で弱いものであるとの自覚は同胞意識となります。それは、罪人への寛容さに繋がります。寛容さは、全面的か、あるいは部分的かもしれませんが、罪を大目にみる、すなわち許容し、罪人を赦すことがあります。赦しは罪人を善へと向かわせ、再び生き生きと正しく生きることへの契機となります。赦しは人を生かす優しさです。

しかし、ここで注意しておくべきことがあります。寛容さは、別のところからも生じます。それは、自分も罪人であるとの負い目や、うしろめたさからです。負い目やうしろめたさからの寛容さや赦しは、相手の為でなく、自分のうしろめたさを払拭する為、すなわち自分の為なのです。それは、結局、自分自身を、さらには相手をも、ますます苦しめることになります。律法学者やファリサイ派、民衆たちが、その場を去っていったのは、姦通の女を罪に定めなかったのは、うしろめたさからなのか、それとも寛容さからなのか。聖書には書かれていません。彼らの心模様について、筆者はいつも思いを巡らせてしまいます。

寛容さ、優しさの根源

罪なき者が石を打て、のイエスの言葉は、人々に罪びとに対する寛容さ、優しさを生み出したのかもしれませんが。それは、人の不完全さ、罪への傾き、弱さにおける、同じ人間であるとの同胞意識によるものです。しかし、それだけではありません。それを考えるために、欠如論の、欠如にすぎない、という点を、再び取り上げます。

欠如論批判者は、悪は欠如にすぎない、すなわち、悪は実際に存在しない、という意味に誤解しました。しかし、疑うべくもなく、この世に悪は実際に存在しています。魂を押し潰すほどの悲惨な巨悪さえも存在します。他方、魂を打ち震わせるような美しい偉大な善も存在します。善も悪も、この世に実際に存在します。しかし、両者の存在の仕方が異なるのです。善はそれ自体で存在します。他方、悪は善との対比によってのみ存在します。日常的な表現をとれば、善はそれ

だけで理解できるけど、悪は善があつてこそ理解可能となる、となります。哲学用語を用いて表現すれば、善は実体ですが、悪は偶有です。つまり、悪は善の存在によつてのみ存在もし、認識もされるのです。以上の説明における、よつてのみ、とか、あつてこそ、とか、偶有ということが、欠如にすぎない、ということの意味なのです。

学生さんたちのレポートで一番多い批判は、善と悪との関係が実体と偶有の関係であるという点に対してです。それは、こうです。悪が善との対比でしか理解できないように、善もまた悪との対比でしか理解できない。すなわち、善と悪とは、紙の表と裏の関係である、と。それは、間違いだと、筆者は思います。嘘が悪いというのは、正直さ、あるいは誠実さという善との対比によって知られます。しかし、正直である、とか、誠実であるとかは、それだけで、良いことだと、人は直截に断言します。

さて、欠如論が指示する善の実体性と悪の偶有性から、何がいえるでしょうか。目を向けるべきは、悪だけでなく善にも、否むしろ善にこそ目を向けるべきだ、ということです。正直者のお爺さんの例を思い出してください。お爺さんが嘘をついたのは悪いことですから、きっちりと罪に定められなければなりません。しかし、嘘をついたとしても、お爺さんの根っこは誠実で優しいのです。その根っこにある善は、罪をつぐない、善に向かわしめる可能性であり、その契機なのです。それに目を向けるなら、人は寛容になり、お爺さんを赦すこともありえます。同様に、姦淫の女においても、彼女の根っこには善があるのです。こうみえてくると、罪人への寛容さや優しさは、人間は同じく弱いものだとう同胞意識だけでなく、人の根っこにある、つまり実体としてある善に目を注ぐことにあるのです。

4. イエスも、姦淫の女を罪に定めなかった

そこに居合わせた人々と同じく、イエスも、姦淫の女を罪に定めなかった。その理由は何なのでしょう。ましてや、イエスは神の子であり、全く罪なき者です。民衆たちと違って姦淫の女を裁き、石打つ権限はあったわけです。それにも関わらず、何故、赦したのでしょうか。このことから、民衆たちが女を罪に定めなかったことと、イエスが女を罪に定めなかったこととは、全く別の次元にあることが分かります。それを考えていきます。

律法学者やファリサイ派、民衆の場合／善悪欠如論の限界

民衆たちが、女を罪に定めなかった理由をまとめてみます。ひとつには、弱者としての同胞意識、もうひとつには、人の根っこにある善性への信頼、です。ここには、問題がふたつあります。欠如論の寛容さや優しさは、罪人が善へと向かうことが前提とされています。つまり、強く期待されています。そうであるなら、罪人が善へと向かわず、再び悪へと傾いたとき、その期待は激しい怒りとなり、厳しく相手を咎めることになります。日常的に言えば、赦してやったのに、ということです。こうして、寛容さや優しさは崩壊します。欠如論の善悪の次元にとどまるかぎり、これは避けられないことです。これが善悪欠如論の、すなわち善悪という次元の限界なのです。

聖書の物語は、実に絶妙です。姦淫の女をイエスの前に連れてきたのは、ほかの誰でもなく、まさしく律法学者なのです。律法とは、ことの善悪をはかるものです。律法学者とは、律法の善悪を厳密に遵守する人です。ならば彼にとって、姦淫の女は石打ちに値するのは、当然の帰結です。しかし、善悪の次元、すなわち律法の次元においても、上で述べてきたように、限界はありますが、寛容さや優しさはありえます。その見落としを、強いていえば、自己矛盾を、イエスは突いたのです。罪なき者がまずは石を打て、と。律法学者は、善悪の形式的遵守

と、悪ばかりに心が向いてしまいがちです。罪人の根っこにある善性にこころを砕きません。この律法学者のように、普段、私たちも、頑ななこころで生活しているのではないのでしょうか。

さらに根本的な問題があります。善悪の欠如論における寛容さや誠実さでは、罪人の根っこの善性を見やるだけです。それを信頼するだけであり、また、実際に善に向かうことを希望するだけにすぎません。信頼や希望だけの優しさは、罪人の善性を実際の善に向けて現実化する契機にはなっても、原動力にはなりえません。では、何が原動力になるのでしょうか。さらには、寛容さや優しさが、怒りに変わらない次元とは、何なののでしょうか。

多く赦された者は多く愛する／善悪欠如論を超えて

イエスが姦淫の女を赦された理由は、聖書には何ら書かれてはいません。しかし、まず確実にいえることは、次のことです。イエスが神の子であり、全く罪なき者であることからすれば、赦された理由は、欠如論の善悪の次元にはないことは確かです。聖書に書かれているイエスの物語の全体から、筆者はこう考えています。

この問題を考えるにあたり、姦淫した女のこころについても、着目しなければならぬと思います。しかし、これも聖書には何も語られてはいません。聖書に書いてないことを勝手に想定して解釈することは、聖書解釈においては禁じ手です。しかし、ここでは聖書学的な厳密な解釈が問題となっている訳ではありません。なので、聖書の全体に即しつつ筆者が想像することも、極端な逸脱でないかぎり、許されると思います。聖書はそうのように読まれることを、イエスはむしろ望んでいると思います。

さて、筆者の想定はこうです。女が性的欲求から夫以外の男と関係を持った。あるいは、夫以外の人にこころが惹かれてしまい、どうすることもできなかった。さらには、家族の生活のために売春で稼がざるをえなかった、などと想定さ

れます。そして、どの場合においても、女には罪への深い苦悩と悲しみがあります。さらに彼女のこころを見つめれば、その苦悩と悲しみは、罪を犯していることに尽きるものではありません。この苦悩と悲しみは、夫への済みなさや愛情、姦通相手への愛情、家族への愛情に対する裏切りにあるのです。つまり、姦通の女の魂は罪に傷つき、愛に死んでいるのです。

イエスは、女の愛ゆえの苦悩や悲しみに、こころを動かされたのだと、筆者は思います。イエスは純粋な愛そのものです。なので、このような死に至る苦悩や悲しみのなかに、女を捨て置くことはできないのです。そこでは、姦淫が罪であるとか、石打ちに値するとか、しないとかは、もはや関係ありません。善惡の次元から離れてしまっています。それ故、イエスは女を罪に定めません。むしろ、女の愛の苦悩に共鳴するのです。そして、赦すことで、女を絶望の死から甦らせたのです。赦すことによって、女の罪意識が払しょくされ、根っこにある善へと向かわせるのです。それだけのことではありません。赦しは女を愛で包み、女の内にある愛が甦り、その愛が善へと向かわせるのです。

赦しは愛を生みます。それ故、赦すことも愛です。赦しの愛が、女の根っこにある愛を、そして善性を発動させる力なのです。イエスは、別の個所で、赦されることの少ない者は、愛することも少ない（ルカ7：47）、と語ります。裏を返せば、多く赦された者は、多く愛することになる、のです。さらに、赦すことは愛です。なので、多く愛された者は、多く愛することになる、のです。

以上のことが示しているのは、罪の後ろに惡をみず、愛の悲しみを想う、ということ。つまり、イエスの言動は、愛の次元で動いているのです。そして、この愛の次元は、善惡の次元を、律法を排除するのではなく、むしろ善惡の次元を包摂し、善を、律法を完成する原動力なのです。聖パウロは、新約聖書にある手紙のなかで、愛は律法を全うするもの（ロマ13：10）、と書いています。愛が善の原動力です。他方、愛の原動力は愛以外にありません。愛は自らを原因とするということは、愛や、愛を基底とする善の根拠は問えないということです。厳

密に言えば、問わないのではなく、問えないのです。しかし、あえて愛の原動力について何かを語ろうとするなら、愛の原動力は愛を信じることです。しかし、信じることは愛することです。やはり愛は愛以外に原動力も根拠もないのです。

これが、最初に述べた、人殺しが悪であるということの根拠は問わない、ということの理由です。人殺しが悪であるのは、善の欠如ではなく、根本的な愛の欠如にあるからです。善悪欠如論は愛の欠如論で包括され、基礎付けられ、完成します。

5. 無知は関心の欠如

以上から、キリスト教が愛の宗教であることは、明らかです。ならば、キリスト教に対する怪しげさや、危なさという印象は、全部とは到底いえませんが、少しは取り除けたのではないのでしょうか。そこで、次はキリスト教への関心を、筆者は喚起してみたいと思います。関心といっても、ふたつあります。ひとつは知的関心、もうひとつは、生きることへの関心です。

知的的好奇心や関心は、偏見や誤解から解放する

つい最近、ローマ教皇が日本を訪問なされました。それを機にメディアが、ローマ教皇やキリスト教が如何なるものなのか、特集をしていました。そこから、キリスト教信徒の圧倒的な多さや、キリスト教文化の伝統的深さや厚みが、知られたと思います。バチカンの聖ペテロ大聖堂、パリのノートルダム寺院、その美しいステンドグラス、ミケランジェロによるシスティーナ礼拝堂の天井画、レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晚餐』、グレゴリアン聖歌などの美しい讃美歌、バッハの『マタイ受難曲』、映画にもミュージカルにもなっているビクトル・ユーゴの『レ・ミゼラブル』、ミルトンの『失樂園』、ダンテの『神曲』などなど。西欧キリスト教文化2000年の歴史が、これらの建築、美術、音楽、文芸な

どの根幹をなしています。まさに、キリスト教は西欧社会の精神的支柱を担ってきましたし、今も担っています。

なので、これら知ることは欧米社会そのものを知ることになります。また、今の世界の宗教的事件をその深層から知ることができます。キリスト教への知的関心は、それらへの目を開かせ、最初に述べた無知による誤解や偏見から、あなたを開放してくれます。キリスト教への不信感がたとえあったとしても、知的好奇心、知的関心を持つことは大切です。また知らないことが知られるのは楽しいことであり、こころも豊かにします。

日本においても、キリスト教文化の影響は、身近にあります。『失楽園』や『神曲』はゲームのあらすじや、場面設定として用いられています。ゲームだけではありません。アニメやコミックや、TVドラマでも、キリスト教における悪魔の面々の名前をよく耳にします。ルシファーやサタン、ベルゼブルなど。ラファエルやミカエルやガブリエルなどの天使たちの名前もそうです。さらには、カインやアベル、ノアなど聖書の登場人物の名前も耳にします。視聴者たちの中には、これらがキリスト教の悪魔や天使の名前、聖書の登場人物の名前であることを、まったく知らない人もいます。それを知れば、もっと楽しくなります。

生きることへの関心／愛への関心

生きすることは、とてもしんどいことです。何も意図しないにもかかわらず、普通に生きているだけで、人と摩擦をおこしたり、人を不愉快にしたり、不愉快な思いをさせられたり、傷つけたり、傷つけられたり、と。時には、胸が張り裂けてしまうような悲しみや、怒りにとらわれます。聖パウロはいいです、善を欲していても悪をなしてしまう（ロマ7：19）、と。ときに、悪がすべて自分にあるように思えてしまいます。反対に、世界があまりにも争いと悲惨、悪そのものに満ちていて、ムンクのように耳を覆いたくなります。どちらにしても、この世界とおさらばしたら楽になれるかも、とも思ってしまう。私と世界が不完全であ

る限り、これらは避けて通れないことです。これは実存的な苦悩です。

しかし、私も人も世界も不完全であっても、それ以上に、私も人も世界も生きるに値するほどに、ときに美しく輝き、美しく思えるのです。それは、愛するときです。幸せに生きたいのであれば、愛に関心を持つことが大切です。愛に関心をもって、私と人と世界を愛することを学ばなければなりません。たとえ、この世が、人が不完全で欠点だらけであっても、です。

ところが人々は、愛に関心を持つとはしません。その理由は現代人のある思い込みにあると、エーリッヒ・フロムは指摘しています。現代人は、成功、名誉、富、権力などの物的な利益が幸せを与えるのであって、愛はそうではない、と誤って思い込んでいる、と⁸⁾。しかし、フロム同様に筆者も、幸せな人生を生きるためには、むしろ愛に関心を持つべきだと思います。そこで、まずはキリスト教の教えである愛に関心をもってみてください。そこに、幸せに生きるヒントが見つかるはずです。

現代人は愛に関心もなければ、愛について学ぼうともしません。その理由は、フロムによれば、愛は自然なこころの発露であって、学ぶべきような技術ではないと、人々が思い込んでいるからだ、と⁹⁾。筆者は、愛することが技術であること、したがって、学ぶべきものである点に関しては、全面的にフロムに賛成します。しかし、フロムは前半の、愛が自然なこころの発露である点を軽視し過ぎている、それどころか、否定しているように思われます。筆者はこの点を批判しておきたいと思います。

まずは、愛の源泉と愛の作用とを、明確に区別する必要があります。愛の源泉、つまり愛そのものは、あくまでも自然に発露してくるものです。愛はこころの深奥から自然と溢れてくるものです。しかも愛の溢れは尽きることがありません。また、そこには技術や作為ということはありません。なので、愛の本質は自由です。その溢れが愛するという作用の原動力です。愛の溢れが自由である一方、溢れには方向性や強弱などが必要です。そうでなければ、愛は溢れすぎて

洪水となり、逆に愛は悪となります。それ故、愛する作用には技術が必要なのです。聖パウロは、愛することの技術として、忍耐強くあること、情け深くあること、ねたまないこと、自慢しないこと、自分の利益をもとめないこと（1コリ13：4-7）、などを列挙しています。

キリスト教は、愛の源泉が人の心奥に生まれつきあることを信じています。なぜなら、神は自分に似せて人間を創造なさったからです（創1：26）。神は愛そのものですから、神の似姿である人間もまた内に愛を秘めているのです。したがって、かかる愛がなければ、人は無に等しいのです（1コリ13：1-3）。そして、それを信じているとは、愛の溢れは自由であり、根拠などないからです。愛は愛であり、それがすべてであるとしか、いいようがないのです。それでも、そのような愛を信じないとしても、生きるために愛に関心を持ち、まずはキリスト教の愛の教えを学んでみては、どうでしょうか。

おわりに

読者の大半である学生さんたちを念頭に、彼らのキリスト教や宗教への疑いのまなざしを啓蒙することを目的に書きました。それでも、スコラ的な煩瑣な理路を展開してしまったところもあり、若干、理解しづらいのではないかと、もっと別の書きようがあったのでは、と反省しきりです。宗教やキリスト教の怪しげさ、危なさという印象を、少しはとり除けているでしょうか。すこしはキリスト教に関心をもてたでしょうか。それを願うばかりです。しかし、払拭するには、まだまだ考察しなければならないこと、書かなければならないことが、たくさん残されています。それは、宗教と科学、信じることと知ること、現実と理想など、です。これらのテーマについて、また書ける機会があればと願います。

注

- 1) 聖書は様々な形式の、様々な邦訳があります。大きさなどの形式は、自分にあったものを選んでください。邦訳は新共同訳がおすすめです。なぜなら、それは、プロテスタント、カトリックの宗派を問わず、読まれているものだからです。ちなみに、「ヨハネ15：2」とは、新約聖書のなかにある「ヨハネによる福音書」の第15章の2節を指示しています。
- 2) 中世の大学や修道院学校で展開された哲学の総称。それは、キリスト教の学的な基礎づけの試みです。考察の範囲は広大で、天使論や悪魔論にも及びます。その理路は厳格で緻密です。しかし、あまりにも緻密になりすぎて、素人には、迷路に陥った気になってしまいます。そのため、煩瑣学とも揶揄されます。しかし、今日でも重要な考察であることには変わりありません。
- 3) カール・マルクス (1818-83) の言葉。社会主義の理論の展開の中心として、キリスト教や宗教を徹底的に批判した。
- 4) 喜劇王チャップリンの映画『殺人狂時代』に、次のような名言があります。「一人殺せば犯罪者、100万も殺せば英雄。数は殺人を神聖にする (One murder makes a villain ; millions a hero.Numbers sanctify.)」。
- 5) 聖アウグスティヌス (354-430) は、初期キリスト教の偉大な教父で、現代にいたるも西欧文化に多大な影響を与えています。それ故、西欧の教師、と称されます。善悪欠如論に関しては、『告白』第3巻第7章、第7巻12章を参照してください。テキストは中公文庫の山田晶訳が平易で、入手し易いです。
- 6) 聖トマス・アクィナス (1225?-74) は、中世スコラ学の偉大なる神学者で、彼の神学は現代においてもカトリック教会の教えの基本です。それ故、教会博士、と称されます。善に関しては、『神学大全』第I部第5問題を、悪に関しては、第I部第48問題、特に第3項を参照してください。邦訳は創文社から出版されています。
- 7) 聖アウグスティヌスの戦争論に関しては、ジルソン著『アウグスティヌスとトマス・アクィナス』(みすず書房)を参照してください。聖トマス・アクィナスの戦争論は『神学大全』第II-2部第40問第1項を参照してください。
- 8-9) エーリッヒ・フロム (1900-80) 著『愛するということ』(紀伊國屋書店) 第1章を参照してください。

(2020年1月29日受理, 2020年2月6日採択)

